

# 非現実的な 真実

THE UNREALISTIC TRUTH  
OHTSU KIYOSHI



大津清志

# 非現実的な 眞実

THE UNREALISTIC TRUTH  
OHTSU KIYOSHI



大津清志

装幀 溝上なおこ

## 目次

気になる怪光線	5
今度は白い光が	13
今度は私の目の前で白い光が	18
失われた記憶とDNA	28
変わり果てた姿	42
本当の理由	45
生物は地球上だけのものではない	50
最終目標	59
最終章	68

それは言葉では言い表せないような、今もなお私自身、信じられないことが親友に遭ってしまった事実を認識できません……。

それを見て知ってしまった私はその日から親友が、心身共々破壊され、最終的には生命までを未知なる異星人に奪われて行く様を、何も出来ずに助け出すことすら出来なかった私達人間が、異星人と私達人間の現代医学と科学のレベルの違いを見せ付けられた今、この先未来の地球に住む全種類の生命体の身の安全が果たしてあるのか？ とうことを、今まで見たことと経験したことを、お話し致します。

## 気になる怪光線

今から三年前、私と、その友人とは神奈川県小田原にある同じ女子高校の同級生で、同じ幼稚園からの幼馴染の親友の話です、高校卒業まであと半年位の夏あたりから彼女が突然豹変してしまう出来事から始まります。

彼女の名前は佐藤里奈、両親と三人家族で、私の名は杉崎祐子。家族は四人家族で両親と二つ年上の兄が居ます。

里奈と私は幼い頃からとても気の合う仲で、お互い名前呼び合う大親友で、二人共、性格も似ていた。

もちろんお互いに隠し事などなく、何でも喜怒哀楽をお互いに共有してきた仲でした。ちなみに私の家から里奈の家は距離的には、そんなに遠くない。

ちょうど下から丘の上を見上げる感じの距離で一キロ弱位だと思う。

私の家から里奈の家はよく見える。

里奈の部屋から私の部屋も、お互いに手を振ればよく見える位の距離で、だから二人共幼い頃から親友なのは、そんな距離感もあつてだと思ふ。

そしてあれは八月の蒸し暑い熱帯夜の日に彼女の部屋の窓に青っぽいレーザーポイントみたいなのが彼女の住む小高い丘の近くにある、そんなに高くない裏山辺りから差し込んで来たことから始まったのです。

その日、私と里奈は学校でクラブ（バレーボール）を終え、帰りに小田原のデパートに少し立ち寄り、秋物のシャツなどの商品を買いもしないで見てざわり、お互いに試着などしながら楽しんで家に向かい帰って行き、小田急線沿いの、ある駅に着いた時にはもう辺りは真つ暗で、二人はお互いに、

「祐子、明日またね〜」と里奈が言い、私が「うん、明日ね〜」と答え、手を振りながら分かれて行った。

二人は家族の者に夜食の時間を遅らせたりしたので家の者に怒られるのではないかと足早に帰って行ったのでした……。

私は八時過ぎに家に帰り、やはり案の定、母親が、

「何時まで遊んでいるの、みんな、お腹空かせて待っているじゃない、何処に行っていたの？ お兄ちゃんなんか先に食べちゃったじゃない」と、顔には出していなかったが、言葉の口調が凄じい剣幕だったのを覚えている。

私は食欲も失せ、軽く晩御飯を済ませ、食器も洗わず自分の部屋のある二階に駆け上がり、パソコンにスイッチを入れインターネットのニュースやツイッターなどを見て、十一時位かなり、入浴も済ませ自分の部屋で髪の毛をドライヤーで乾かしながら里奈んちをチラッと見たら、何か里奈んちの裏山の頂上辺りから細く青い光線というか、青色したレーザーポインターのような光が里奈の部屋の窓を照らしている。その里奈の部屋はもう真つ暗だ。私はその時（寝ているのかな？ 何だろうあの光は？）と思い、窓を開け、もう一度念を押して見てみた。

暗くてよく見えないが、やはり何か山の上に小さな雲のような物が見える。



その雲のような処から青い一筋の光というか光線というか、その光が里奈の部屋に真っ直ぐ線を引いている。

私は気になり里奈に携帯でメールしてみた。

だが、返事はなく、暫くすると、その光線も消えていた。

私は何かの反射した光なのかなと思い、その日の私は何事もなかったように寝てしまった。

次の日、朝、学校へ行くのに、里奈をいつものように、いつもの時間に駅で待っていると、里奈から

「ごめん、今日は何だか頭が痛くて風邪を引いたみたい、今日は学校休むわ」

と、私にメールしてきた。昨夜のことが気になり私も

「風邪？ 分かった。ところで昨夜十一時位に変な光とか里奈んち部屋の窓に当てられていたけど知ってた？ それで特にその光、問題なかったの？」

と、メールで聞いてみた。

それから十分位してからかな……。

里奈から

「別に何にもなかったよ、疲れちゃって、その時間寝ちゃってたよ」

というメールがあり、その日は特に私も安心してか、気にしないでいた。

しかし、体調など心配してか、私は里奈に学校から何度かメールを送信したが返信がない……。

そんな里奈を心配した私は帰りに里奈んちに寄ることにした。

学校からの帰りにもメールしたが返信がなく、電話もかけたが電話にも出ない。

急いで里奈んちの家に行って、家に着いたには着いたのですが、玄関のチャイムを鳴らしても出てこない……。

里奈の両親は共稼ぎで夕方六時過ぎにならないと帰ってこないし、姉妹兄弟も居ないから尚更に心配で……。

何度もチャイムを鳴らしたが誰も玄関には出てこないの、私は里奈んちの玄関の取っ手を、そつと握り引いてみた。